



# 信友会会報

2009年6月

## <<5月例会より>>

信友会の今年度は阿佐ヶ谷教会創立 85 周年とプロテスタント日本伝道 150 年に関連する学びを続けます。5 月例会は江戸時代末期にアメリカから来日したヘボン先生が残した多くの足跡と日本伝道について、その熱き思いを大久保勝兄に語っていただきました。

### 信友会 5月例会

#### 「ヘボン先生の信仰と日本伝道への熱い思い」

大久保 勝 兄

プロテスタント日本伝道 150 年の記念の年に、私の最も尊敬するヘボン先生について話す機会を与えられ感謝している。ヘボン先生は幕末に医療伝道師として最初に日本に来た一人である。ヘボン先生の本名は、ジェームス・カーチス・ヘップバーンであるが、音声では「ヘボン」と聞こえ彼は気にせずこの名を使い、日本文字では「平文」と書かせた。

アメリカの有名な映画女優キャサリン・ヘップバーンはこの一族である。

#### 1. ヘボンの出自と東洋伝道

ヘボンのルーツを辿ると、先祖は 1773 年にアイerland から改革派のキリスト者としてペンシルバニアに移住した。そしてヘボンは約 40 年後の 1815 年に著名な弁護士之父と牧師の娘の母との間に長男として生まれ、幼少より信仰に根ざした家庭の中で育った。16 歳でプリンストン大学に編入し 17 歳の卒業時には、父からは弁護士か牧師を薦められたが、口下手であるので医者道をめざし、ペンシルバニア大学医学部に入学した。21 歳で卒業し医学博士の資格を取り眼科医となった。1838 年にノリスタウンで開業し、1840 年にクララ・リートと運命的に出会い結婚した。クララの家もイギリスからピューリタンとして渡った由緒ある家系であった。

当時、東洋伝道が盛んに行われ、ヘボンは、「福音」を知らずに死んでゆくアジアの人々への伝道を志し、クララと「主の僕」として生きることを確認して、1841 年に米国海外伝道協会の要請を受けてアモイ伝道に向かった。この年アヘン戦争が始まったので、シンガポールに留まり、ここで 20 年間日本伝道を共にするサムエル・ブラウン宣教師と出会った。アヘン戦争終了後に、マカオを経てアモイに入り、2 年間の施療を行った。ここでは、ドイツ人宣教師のカール・ギュツラフと出会い、彼が尾張の漂流民の音吉等と翻訳した「ヨハネ福音書」を入手しアメリカへ送った。これは、「ハジマリニ、カシコイモノゴザル」で始まる最初の日本語の聖書の一部であった。しかし、アモイの気候と水は劣悪で、ヘボン夫妻もマラリアに罹り 2 年間の活動を終えて帰国した。

#### 2. 日本伝道への準備

帰国後、ニューヨークで眼科医院を開業したが、彼の誠実な人柄と治療の確かさで評判を呼びこの地で有名



な病院となった。13年間の医療活動では、高い知名度で莫大な財を成したが、3人の子供を幼少時に失い、気持ちは晴れず、東洋伝道への思いを強く残した。

1853年にペリーが浦賀に到来して開国を迫り、1856年には、ハリスが下田に総領事として赴任した。1858年日米修好通商条約が締結され神奈川、長崎、函館の3港が開港された。条約の8条には信教の自由が謳われた。ハリスは熱心なキリスト者で日本には誰にも尊敬される人格者を派遣すべきと提言していた。

日本の開国を知ったヘボンは、海外伝道の心を再び燃やし、「福音を全世界に述べ伝えよ」というマルコ福音書16章の言葉に心を振り立たせ、長老派海外伝道協会に申し込み医療宣教師としての派遣が許された。そして、一人息子のサムエルを残して翌年の1859年10月18日に神奈川に上陸し、15日後に来日したブラウン宣教師と成仏寺に居をかまえた。1861年にはシモンズ宣教師が住んでいた近くの宗興寺に施療院を開設した。西洋医学による治療は知れ渡り、江戸からも患者が集まり5ヶ月間で3,500人となった。治療費は、アメリカから私財を売り払って作った1万ドルで賄い、患者からは一切取らなかった。キリシタン禁制に高札は未だあり、日本人への伝道はできなかったが、ブラウンたちと成仏寺で行った礼拝が日本最初のキリスト教の礼拝になった。その後、いわゆる生麦事件が起り、イギリス人2人の治療を行っている。1862年には横浜にできた居留地39番に住居と施療院を移転してここで18年間診療活動を行った。眼科診療や、有名な歌舞伎役者の足を切断治療し義足を装填して舞台に戻すなどで施療院の名声はますます響きわたった。

### 3. 「和英語林集成」編纂と「新旧約聖書」の翻訳

ヘボンは新旧訳聖書の翻訳を行うため、先ず和英辞典の編纂をめざした。しばしば散歩に出かけ、「これは何ですか」と誰にでも聞き、彼の考案したヘボン式ローマ字に当てはめて語彙を集めた。日本語は武士や平民の言葉など複雑で語彙も多い。彼自身は平家物語等の古典を読み、また鍼医師で漢学に優れた矢野隆山（最初の受洗者）等を日本語の教師に雇い辞書の編纂に励んだ。1867年には、3万字を集めた「和英語林集成」を上海で印刷した。明治維新の前年で当初は売れなかったが、幕府や大名のまとめ買いなど大量に売れるよう



になり最後は数倍のプレミアが付いたという。外国人の日本語学習にも役立った。

新訳聖書の翻訳は、ヘボンとブラウンが中心となって始められ、日本人に親しめるひらがなに漢字を交えてカナを振る形にした。1872年にヨハネ福音書とマルコ福音書を、1873年にマタイ福音書を完成させた。まだキリシタン禁制中であり、日本語教師の奥野昌綱（最初の牧師）の決死の努力で木版印刷により千冊印刷してすぐに売り切った。その後の聖書翻訳は、各教派別ではなく超教派で行うことになり、1874年にプロテスタントの宣教師や優れた

日本人学者も加わって開始した。翻訳には聖書的にも文学的にも優れた文体にすることとした。1880年に5年6ヶ月を要して新訳聖書が完成したが、ヘボンの力と日本人学者の力が大きく、美しい文体の聖書ができあがった。

旧約聖書の翻訳は、ヘボン夫妻の1年間の療養のためのヨーロッパ旅行の後の1882年に、ヘボンを委員長として開始した。多くの宣教師たちに植村正久、井深梶之助などが加わり担当を決めて始めたが、集まりが遅く出来も悪かった。また、伝道に専念する人の脱落が増え、ヘボンが大部分を翻訳することになった。1887年12月31日（明治20年）ヘボン72歳の年に旧約聖書が完成した。新旧約聖書の翻訳には11年を

要したが、聖書の翻訳に最初から最後まで関わったのはヘボンだけであった。

#### 4. ヘボン塾と教育への貢献

ヘボンは、来日後すぐに西洋医学と英語を教え始め、入門者が多かった。幕府などから9名の有能な青年を受け入れ、その中には高橋是清（総理大臣）、大村益次郎（陸軍創始者）、林董（外務大臣）、益田孝（三井物産創始者）等日本の指導者になる人材がいた。クララが息子の問題で一時帰米から戻った1863年に、ヘボンとクララは仕事の分担を、ヘボンが施療と西洋医学教育、クララが英語の教育と決めて英学塾となった。教師であったクララは女子教育を志望したが、評判を聞いて40人の青年男女が集まるヘボン塾となった。生徒が多くなるにしたがい、ヘボン、グリーンが英文法、数学、歴史などと時に聖書も教え、クララが読み書き、英作文など英語の基礎を教えた。フェリス女学院の創始者のメアリー・キダーは、ヘボン夫妻が和英語林集成の第2版の印刷のため上海に出かけた1年あまりヘボン塾を預かった。夫妻の帰国後、キダーはヘボン塾の女子を引き取って1870年に英学塾を始めた。これがフェリス女学院となった。

その後、ヘボン塾はグリーンとルーミス宣教師が中心に教えていたが、1873年のキリシタン禁制の高札の撤去により、英学塾から聖書研究を行う神学塾へと移行し、神学部門が築地へ移った。英学塾として残ったヘボン塾も、ヘボンが聖書和訳で忙しくなったので、1876年にジョン・バラに譲り、「バラ学校」と呼ばれる有能な人材を輩出した。同時に61歳になったヘボンは、施療院を閉鎖し医療活動を辞めて居留地から山の手245番地に移駐した。バラ学校も築地に移転した。横浜には、ヘボンに2年遅れて来日したジェームス・バラ（兄）の英語と聖書を教えるバラ塾やブラウンが神学を教えるブラウン塾があり、優秀な神学生を輩出した。バラ塾の石造り小会堂は、後に横浜海岸教会となった。

1877年には、改革派3派が合同した日本基督一致教会による「東京一致神学校」が創設され、卒業生からはキリスト教指導者、教育者や実業家が輩出した。1887年には合同ミッションが芝白金に1万坪の土地を供えた明治学院を創設して、ヘボンが初代総理になった。また、ヘボンは、「和英語林集成」の版權を丸善に2千ドルで売り、明治学院に寄贈して当時東京随一の木造大建築の寄宿舎「ヘボン館」が建設された。明治学院の第1期生には、島崎藤村がいる。

#### 5. 指路教会と晩年のヘボン

ヘボンは教派を越えた日本基督公会を願ったが、キリスト教各派が独立教団をめざしたので、ルーミス宣教師と共に日本長老会を組織して、1876年に住吉町教会を創設した。教会は、貧しい子供達に教育を与え地域に溶け込んだ。会員が200名を越えて教会堂が手狭になったので、火災などに耐えるレンガ建の教会を造るため、一時帰国してミッション本部や一般から寄付を募り、1892年に堅牢で美しい「横浜指路教会」が完成した。「指路」とはヘボン夫妻の母教会シロー・チャーチから採った。

この時、ヘボンは77歳になり夫妻共にリューマチを患っていた。本人は日本に骨を埋めるつもりでいたが、病魔のため適わず、33年の滞在を終えてアメリカに帰ることになった。1892年10月にヘボン夫妻の送別会が指路教会で行われた。ヘボンの挨拶では、自分の医学の技を神の畑である中国や日本の恵まれない人に捧げたこと。キリスト教伝道のため、和英辞典やローマ文字と作って聖書を翻訳したこと。2人とも病気になる帰国するが、我々は神による旅人で、神と共にいる幸いに与った。艱難も多かったが神と共にあるそれは喜びに満ちていた旨を述べた。ヘボンは、ニューヨークに戻り余生を過ごした。90歳の時に日本から勲3等旭日章を送られた。クララは1906年に88歳で逝去した。その後も指路教会や明治学院とは親交をもったが、1911年9月21日（明治44年）に逝去された。96歳であった。ヘボンの愛読した聖句は、「常に励みて主のわざをつとめよ。汝等その労の主にありて空しからぬを知らばなり」の コリント15章58節であり、この聖句に導かれて生涯を神に捧げた。

（文責：玉澤武之）